

【三重の財政(平成28年第1回)より抜粋】

第8 三重県財政の現状

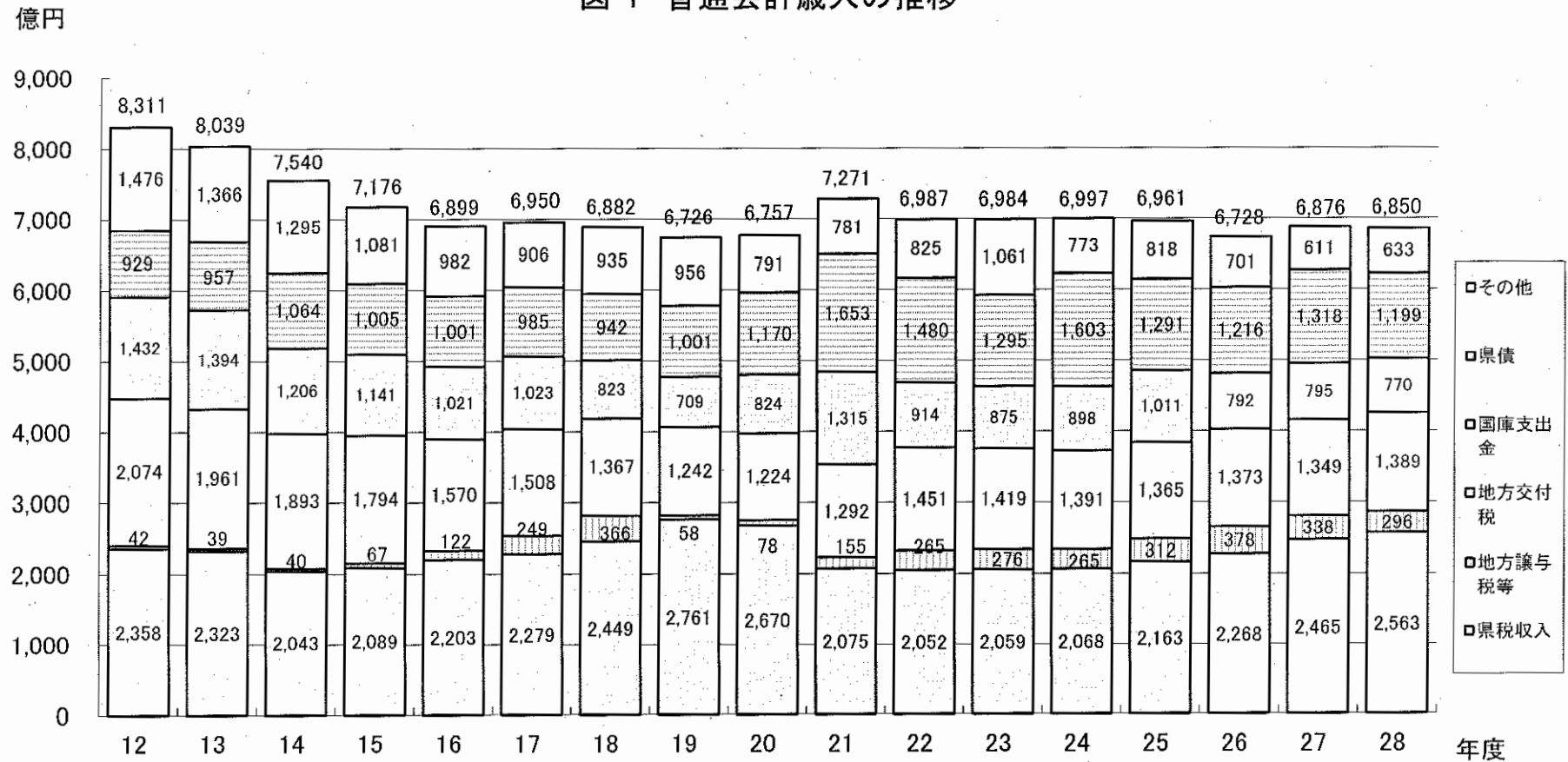
平成28年5月

総務部

I 歳入の状況

(1) 普通会計の歳入の状況

図1 普通会計歳入の推移



- (注1) 普通会計決算ベース(ただし、平成28年度は1号補正後予算額、平成27年度は最終予算額)
 なお、平成27、28年度は、予算ベースのため、前年度からの繰り越しは含まれていない。
- (注2) 「地方譲与税等」とは、「地方譲与税」及び「地方特例交付金」をいう。

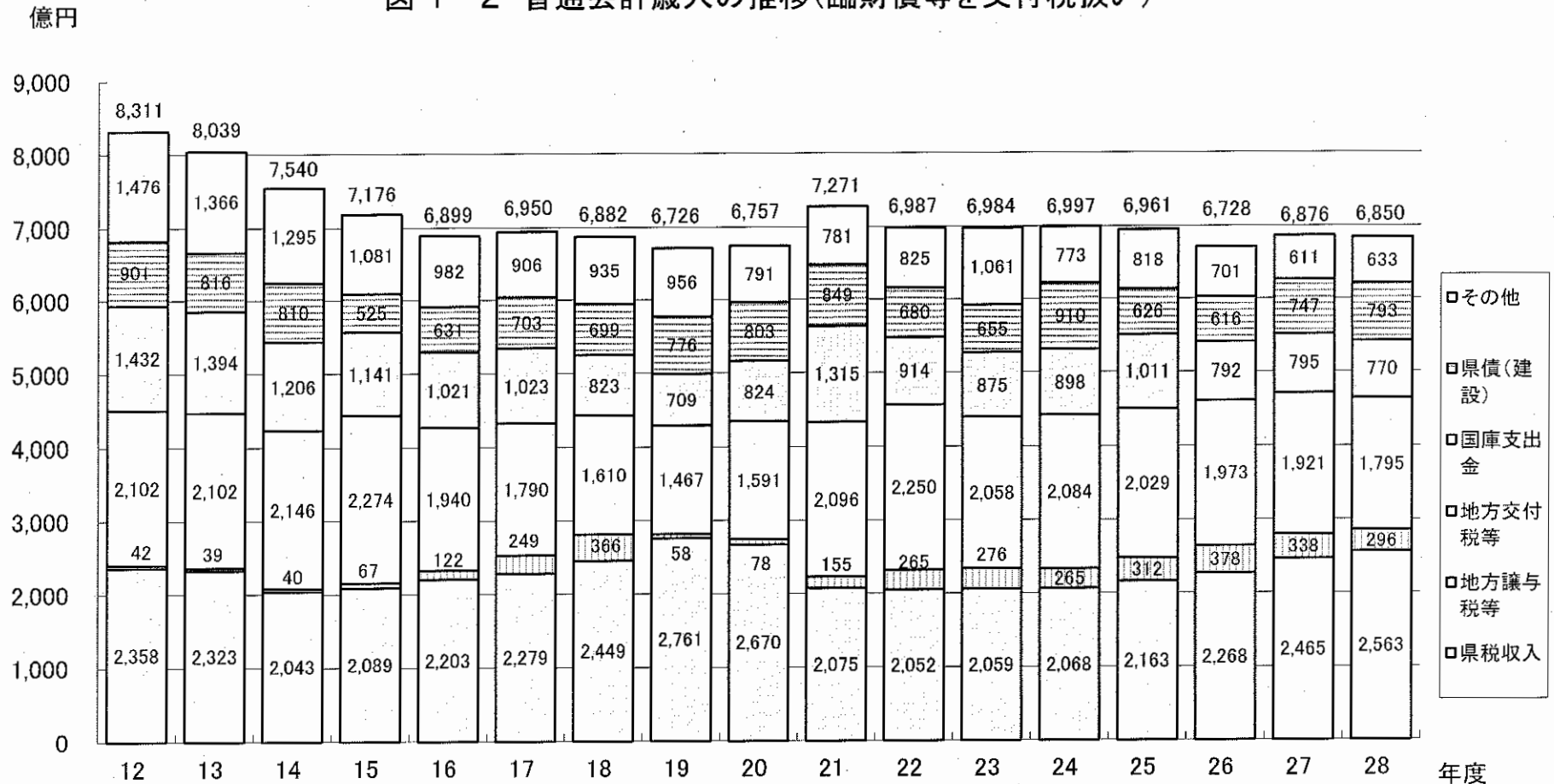
主な歳入項目について

- ・**県税収入** :平成19年度は、三位一体改革による税源移譲のため、大幅に増加。しかし、21年度からは、米国発の世界的経済危機による景気の悪化に加え、地方法人特別税が創設されたこともあり、大きく減少。その後、国・地方の経済政策効果や円安進行による経済の回復や地方消費税及び法人事業税の税率引き上げなどの影響で増加。
- ・**地方交付税**:平成12年度をピークに、三位一体改革の影響もあり、大きく減少するも、米国発の世界的経済危機のあと22年度以降増加し、1,300億円から1,400億円台で推移。
- ・**国庫支出金**:平成12年度以降、減少傾向にあるが、21年度や25年度は国の補正予算の影響もあり、大きく増加。
- ・**県債**:平成10年度をピークに減少傾向にあったが、21年度に大幅に増加。最近では、1,200億円から1,300億円程度で推移。

(注) 普通会計とは、財政比較などのために、全国統一的に用いられる会計のことで、一般会計と特別会計の一部を合わせたもの。
三重県では、11の特別会計のうち、8つの特別会計と一般会計とを合わせて普通会計としている。

(1-2) 普通会計の歳入の状況 (臨時財政対策債等を地方交付税等として整理)

図 1-2 普通会計歳入の推移(臨財債等を交付税扱い)



(注1) 普通会計決算ベース(ただし、平成28年度は1号補正後予算額、平成27年度は最終予算額)

なお、平成27、28年度は、予算ベースのため、前年度からの繰り越しは含まれていない。

(注2) 「地方交付税等」とは、「地方交付税」、「臨時財政対策債」、「減税補てん債」及び「減収補てん債(特例分)」をいう。

(注3) 「地方譲与税等」とは、「地方譲与税」及び「地方特例交付金」をいう。

主な歳入項目について

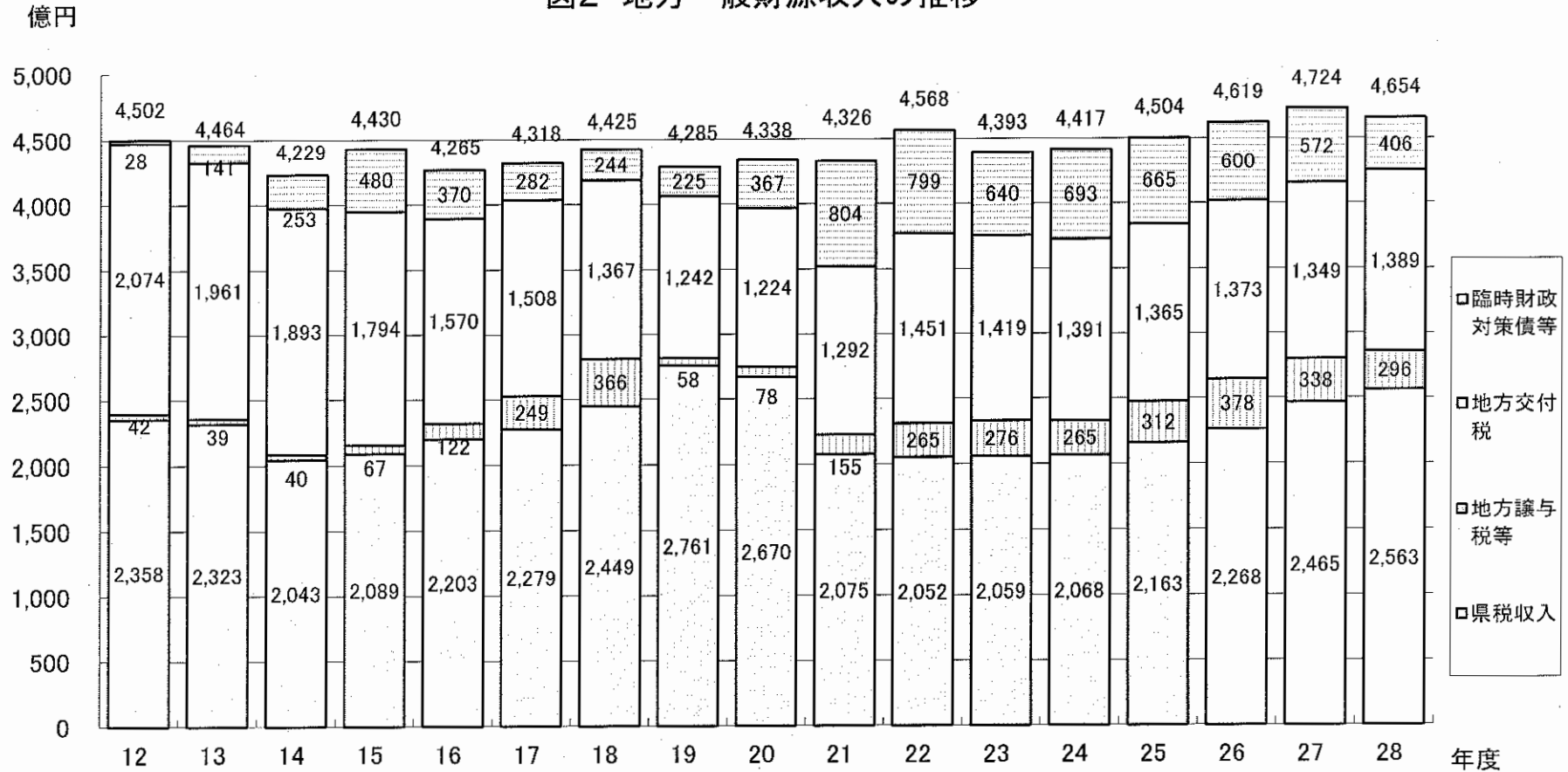
- ・県税収入 : 平成19年度は、三位一体改革による税源移譲のため、大幅に増加。しかし、21年度からは、米国発の世界的経済危機による景気の悪化に加え、地方法人特別税が創設されたこともあり、大きく減少。その後、国・地方の経済政策効果や円安進行による経済の回復や地方消費税及び法人事業税の税率引き上げなどの影響で増加。
- ・地方交付税等 : 三位一体改革の影響もあり、平成19年度には1,467億円まで減少。しかし、米国発の世界的経済危機により、21年度以降、県税収入が大幅に減少したことから地方交付税や臨時財政対策債が増加した結果、2,000億円程度で推移。最近は、経済回復に伴い減少してきている。
- ・国庫支出金 : 平成12年度以降、減少傾向にあるが、21年度や25年度は国の補正予算の影響もあり、大きく増加。
- ・県債(建設) : 近年は、国の経済対策や災害復旧等への対応があった平成24年度を除き、600億円から700億円台で推移。

(注) 普通会計とは、財政比較などのために、全国統一的に用いられる会計のことで、一般会計と特別会計の一部を合わせたもの。

三重県では、11の特別会計のうち、8つの特別会計と一般会計とを合わせて普通会計としている。

(2) 地方一般財源収入の状況

図2 地方一般財源収入の推移



(注1) 普通会計決算ベース(ただし、平成28年度は1号補正後予算額、平成27年度は最終予算額)

(注2) 「地方譲与税等」とは、「地方譲与税」及び「地方特例交付金」をいう。

(注3) 「臨時財政対策債等」とは、「臨時財政対策債」、「減収補てん債(特例分)」及び「減税補てん債」をいう。

地方一般財源収入について

- ・県税収入 : 平成19年度は、三位一体改革による税源移譲のため、大幅に増加。しかし、21年度からは、米国発の世界的経済危機による景気の悪化に加え、地方法人特別税が創設されたこともあり、大きく減少。その後、国・地方の経済政策効果や円安進行による経済の回復や地方消費税及び法人事業税の税率引き上げなどの影響で増加。
- ・地方譲与税等 : 地方法人特別譲与税の創設により、平成21年度から増加したが、27年度からは法人事業税への復元により減少。
- ・地方交付税＋臨時財政対策債等 : 三位一体改革の影響もあり、平成19年度には1,467億円まで減少。しかし、米国発の世界的経済危機により、21年度以降、県税収入が大幅に減少したことから地方交付税や臨時財政対策債が増加した結果、2,000億円程度で推移。最近は、経済回復に伴い減少してきている。

↓

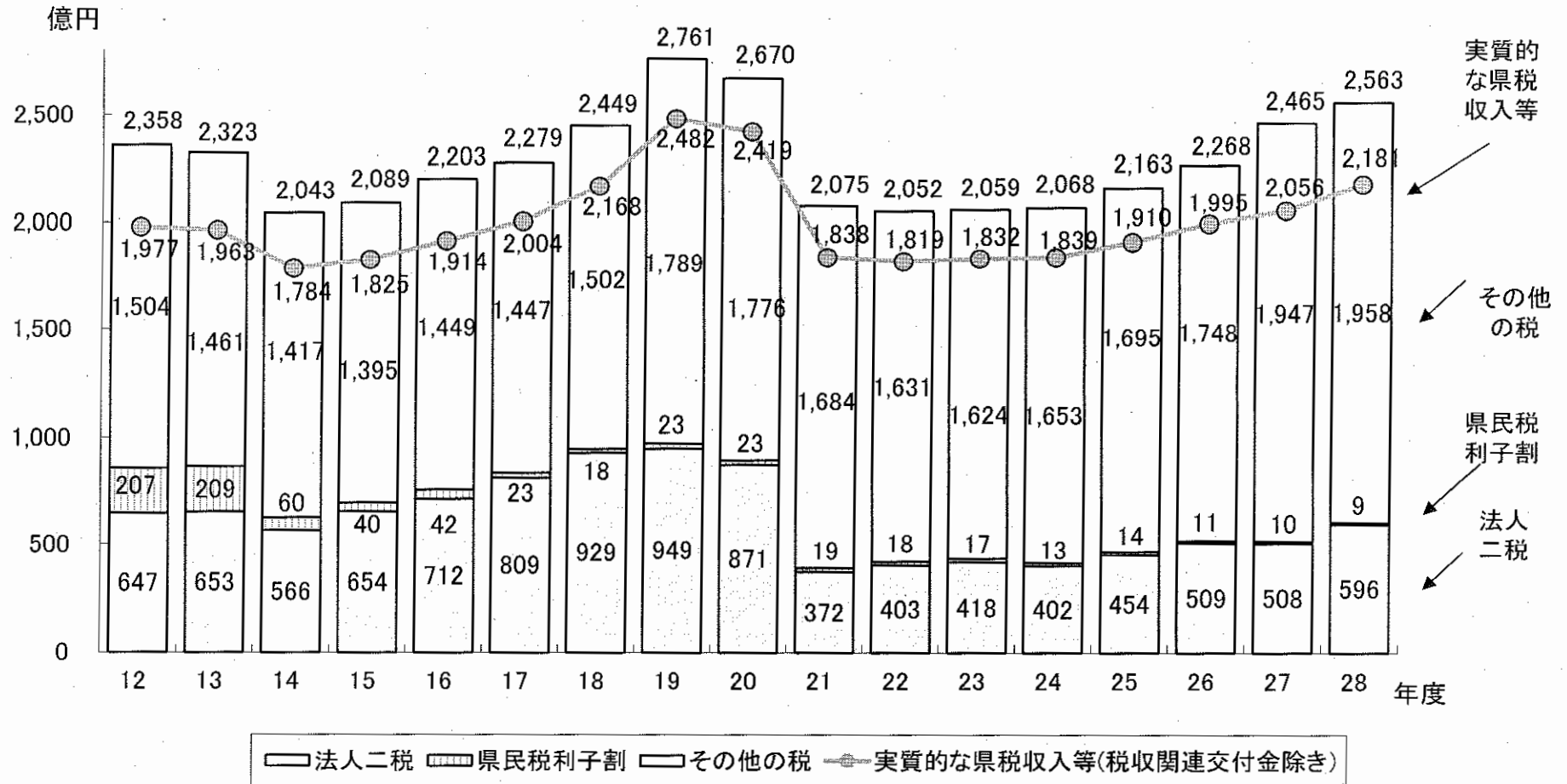
地方一般財源収入の総額は、平成26年度以降、4,600億円から4,700億円まで増加し、直近ピークの22年度を上回っている。

(注) 本県における地方消費税率引き上げの影響額 H25⇒H28:242億円

(注) 本県における法人事業税率引き上げの影響額 H26⇒H28:88億円

(3) 県税収入の状況

図3 県税収入の推移



(注) 普通会計決算ベース(平成28年度は1号補正後予算額、平成27年度は最終予算額)

県税収入について

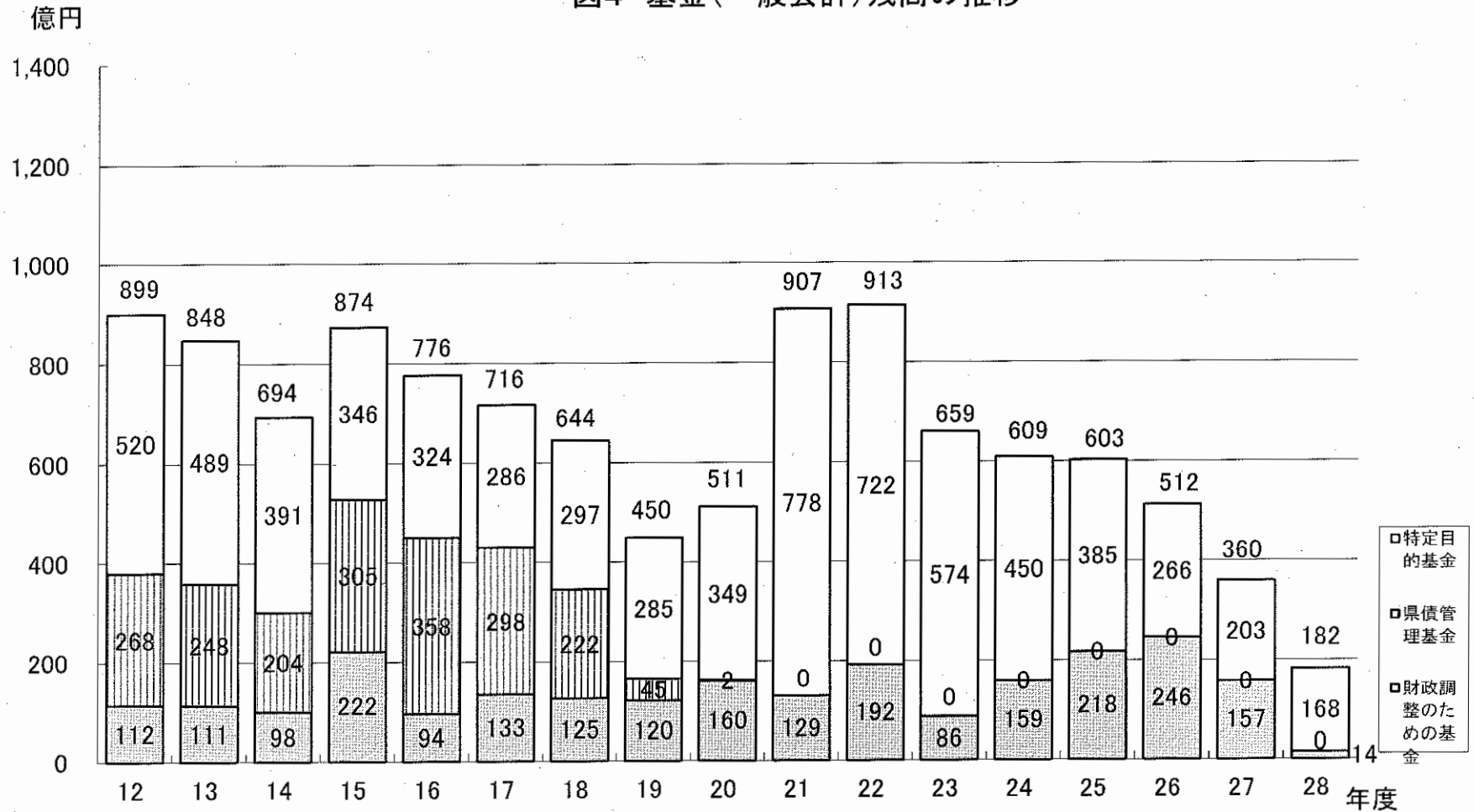
- ・平成19年度から、三位一体改革による税源移譲に伴い、県税収入は、大幅に増加。(税源移譲による影響額300億円程度)
- ・平成21年度からは、米国発の世界的経済危機による景気の悪化に加え、地方法人特別税が創設されたこともあり、大幅に減少。
- ・最近では、国・地方の経済政策効果や円安進行により法人業績が好調なことに加え、地方消費税及び法人事業税の税率引き上げもあり、増加傾向。ただし、海外景気の下振れや国際的な原油価格の下落など、景気変動要因に留意する必要がある。

(注1) 県税収入とは、「県税(地方消費税清算後)」をいう。

(注2) 税収関連交付金とは、「利子割交付金」、「配当割交付金」、「株式等譲渡所得割交付金」、「地方消費税交付金」、「ゴルフ場利用税交付金」及び「自動車取得税交付金」をいう。

(4) 基金残高の状況

図4 基金(一般会計)残高の推移



(注) 平成27年度は最終予算後、平成28年度は1号補正予算後の年度末残高見込

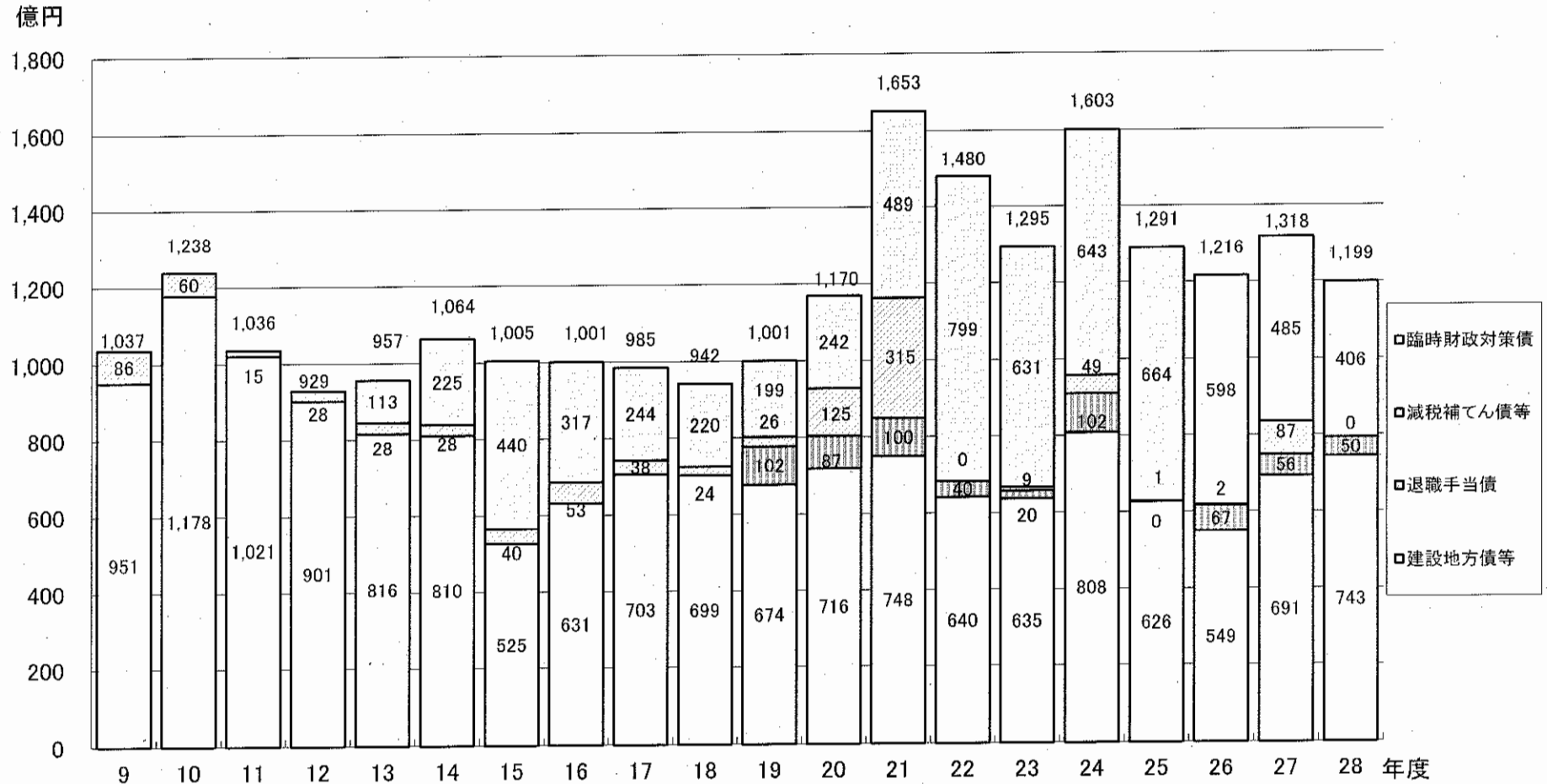
基金残高について

- ・平成21、22年度は、国補正予算に伴う基金の創設等により、特定目的基金の基金残高が増加。
- ・平成23年度以降、基金残高は、減少傾向。
- ・平成28年度末残高は、182億円の見込み。
(平成22年度末残高の20%程度)

(注) 三重県には、現在34の基金(一般会計)があり、うち、33が「特定目的基金」となっている。

(5) 地方債の発行状況

図 5 地方債発行の推移



(注1) 普通会計決算ベース(平成28年度は1号補正後予算額、平成27年度は最終予算額)
 なお、平成27、28年度は、予算ベースのため、前年度からの繰り越しは含まれていない。
 (注2) 減税補てん債等は、「減税補てん債」、「減収補てん債(特例分)」及び「臨時税収補てん債」

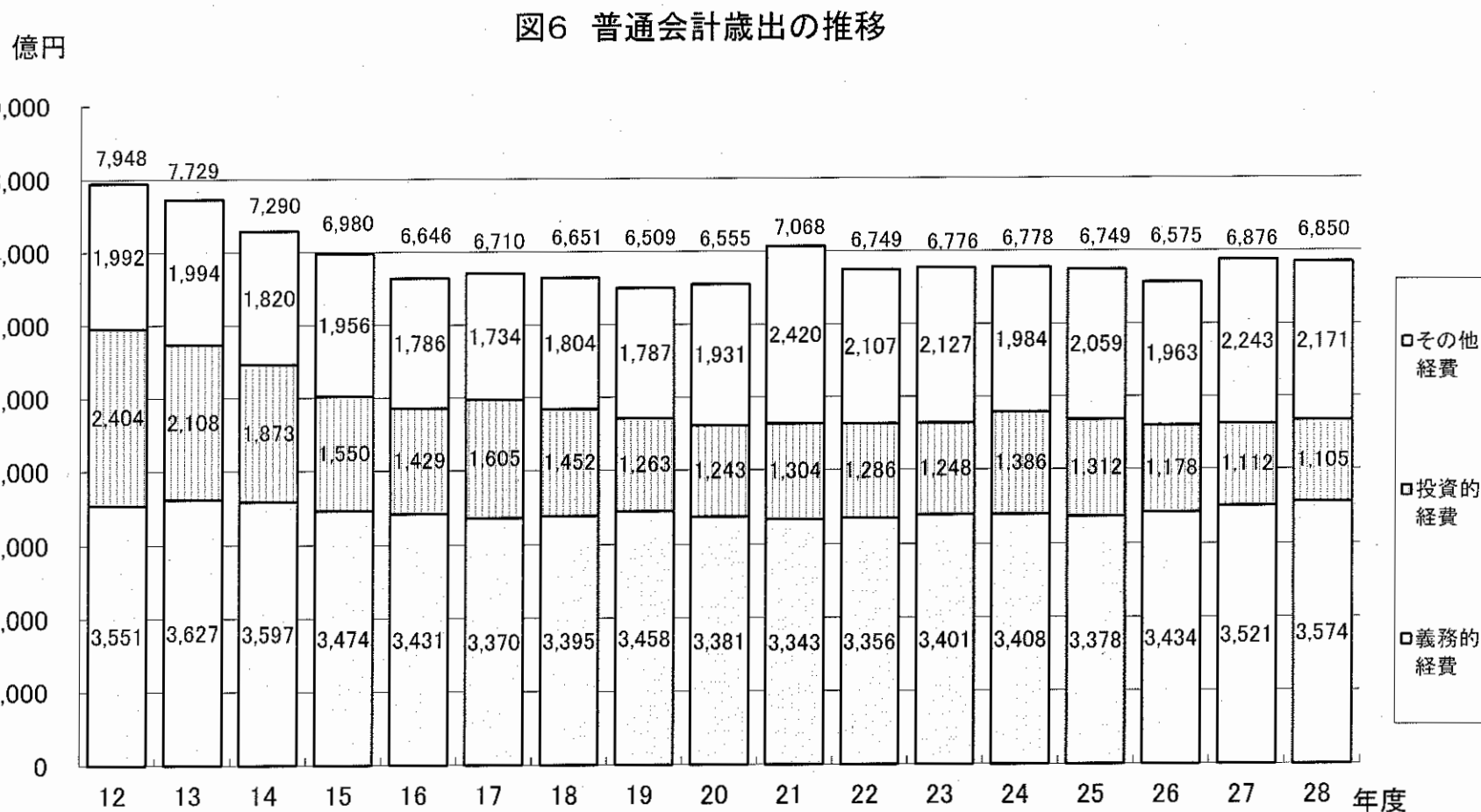
地方債の発行状況について

- ・建設地方債等については、平成14年度まで、国の経済対策に対応した公共事業の実施や大規模建設などにより高水準に推移。
- ・それ以降は、臨時財政対策債（地方交付税から地方債へ振り替えられたもの）や退職手当債（団塊の世代の退職に伴う資金手当債）といった、いわゆる特例債の占める割合が高くなっている。
- ・平成21年度以降は、県税収入の落ち込みに伴い、国による臨時財政対策債の配分額が大幅に増加したが、最近は、経済回復による県税収入の増加に伴い減少してきている。

（注） 地方債は、地方財政法第5条により、建設事業の財源とする場合に発行できるものとされているが、法律に特段の定めがある場合には、建設事業以外の財源にあてられる地方債が発行される場合がある。

II 歳出の状況

(1) 普通会計の歳出の状況



(注) 普通会計決算ベース(ただし、平成28年度は1号補正後予算額、平成27年度は最終予算額)
 なお、平成27年度、28年度は、予算ベースのため、前年度からの繰り越しは含まれていない。

歳出項目について

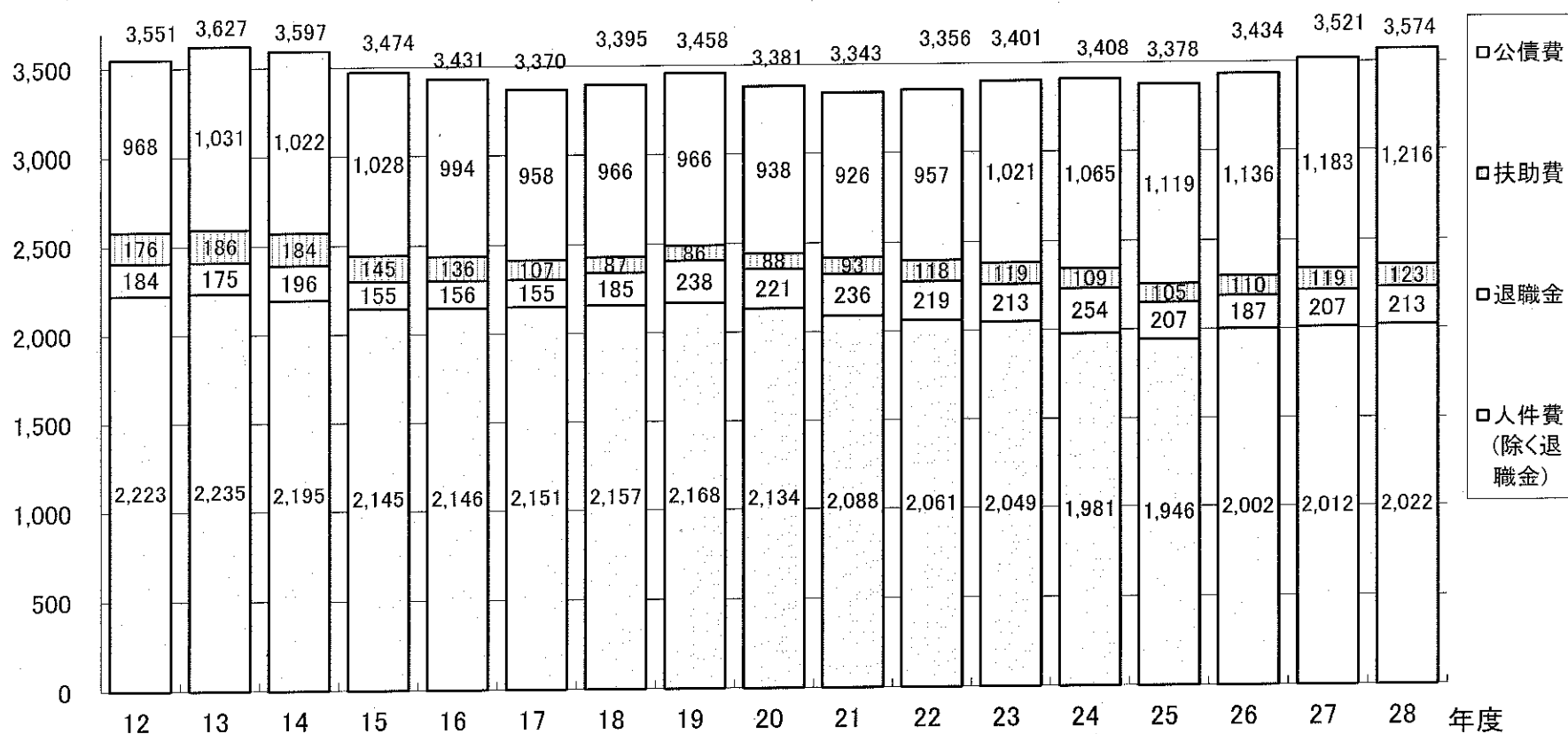
- ・義務的経費：人件費、扶助費（生活保護などの福祉的な支援を行う経費）、公債費（県の長期の借金に対する返済金）のことで、平成15年度以降は3,300億円から3,400億円台で推移してきたが、27年度以降、3,500億円台に増加。
- ・投資的経費：公共事業をはじめとした社会資本整備や公共施設の建設などハード事業を行うための経費のことで、平成14年度に2,000億円を下回り、その後は、減少傾向で推移。近年は、1,100億円台で推移している。
- ・その他経費：近年は、1,900億円台後半から2,200億円台前半で推移。主なものに地方消費税市町交付金、介護給付費県負担金、後期高齢者医療費県負担金など義務的経費に準じた費用が含まれている。

（注） その他経費に含まれる社会保障関係経費は増加傾向
平成25年度（最終予算）799億円（前年度比＋24億円）
平成26年度（最終予算）813億円（前年度比＋14億円）
平成27年度（最終予算）859億円（前年度比＋45億円）

(2) 義務的経費の状況

図7 義務的経費の推移

億円



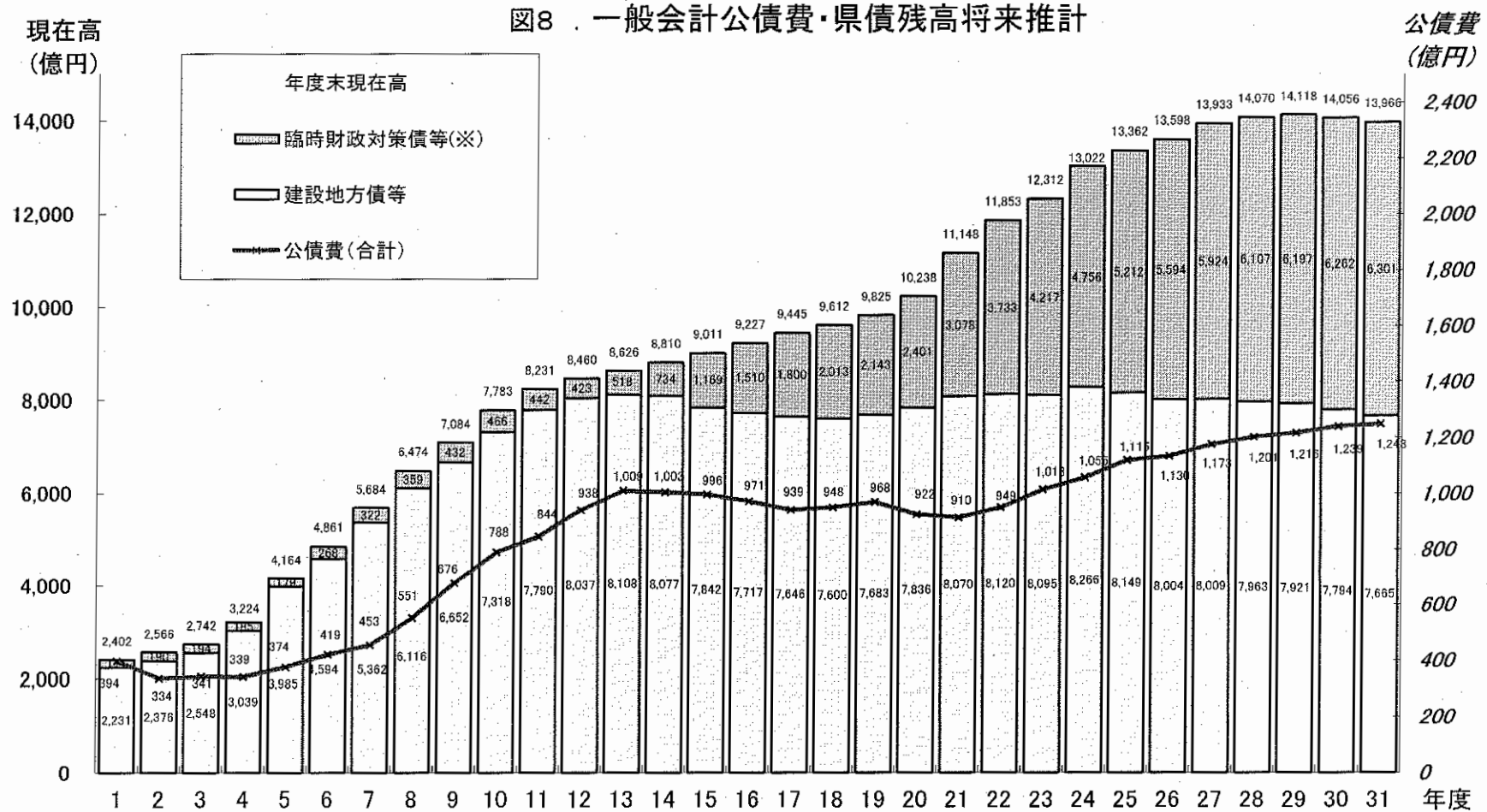
(注1) NTT債を除く。

(注2) 普通会計決算ベース(平成28年度は1号補正後予算額、平成27年度は最終予算額)

義務的経費の状況について

- ・義務的経費は、平成15年度以降は3,300億円から3,400億円台で推移してきたが、27年度以降、3,500億円台に増加。
- ・退職金を除いた人件費は、定数削減等の総人件費抑制の取組により、平成10年度(2,239億円)をピークに、減少してきたが、26年度以降、増加してきている。
- ・一方、退職金は、団塊世代の職員が退職を迎えたことに伴い、平成19年度以降、200億円程度で推移。
- ・公債費は、高い水準で推移し、平成22年度からは年々増加傾向。平成28年度の公債費は、平成12年度の約1.3倍。

(3) 公債費・県債残高将来推計



(注) 県債発行額は、平成26年度までは決算額、平成27年度は最終補正後予算額、平成28年度は1号補正後予算額に第二次行財政改革取組の参考資料にある中期財政見通しに含まれる年度内補正見込額30億円を加算、平成29年度以降は同中期財政見通し(推計B)の数値である。

※ 臨時財政対策債等は、国の地方財政対策により決定される臨時財政対策債や災害に対応するための災害復旧事業債等、発行について県の裁量の余地のないもの。

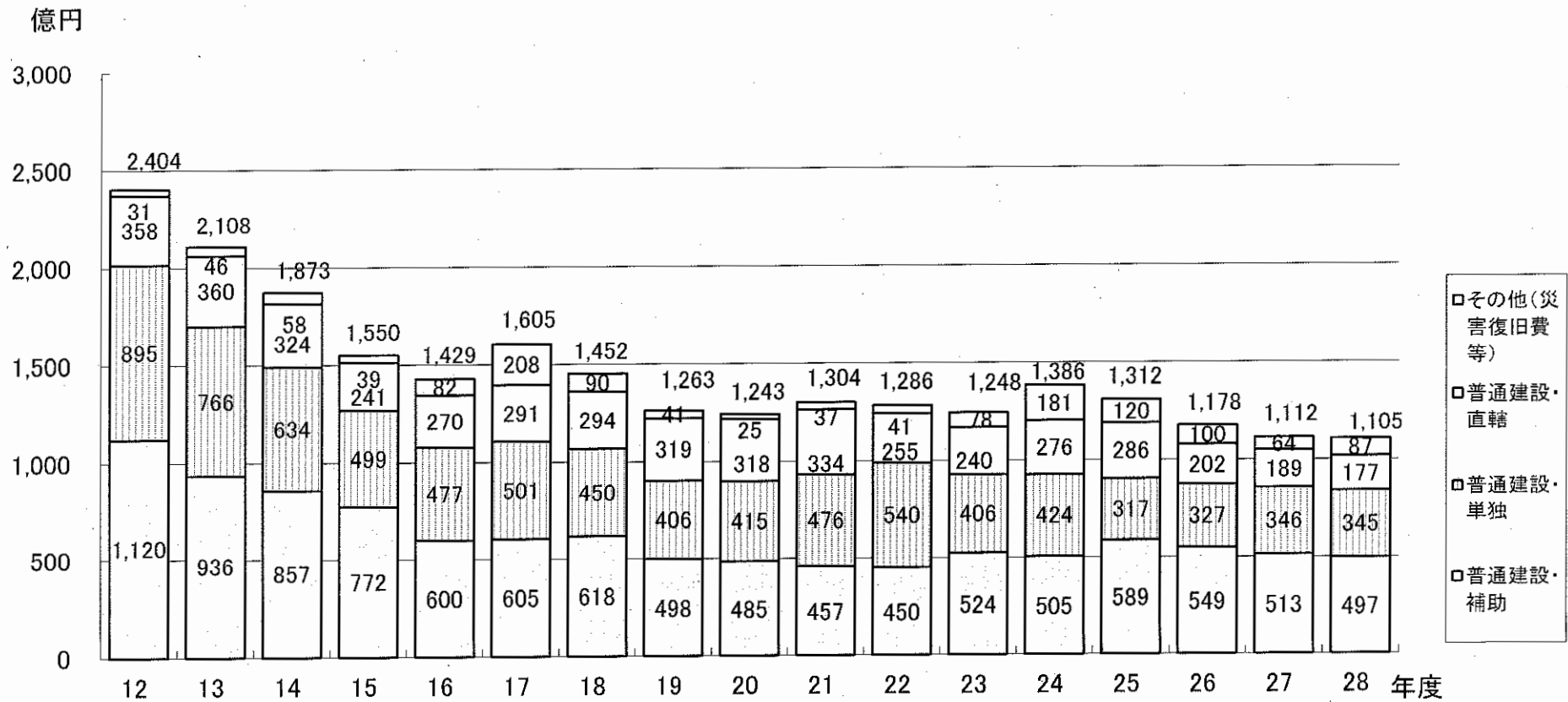
なお、「県立子ども心身発達医療センター」の整備にかかる県債は、平成29年6月の供用開始以降は同センターを所管する特別会計へ移管される予定であることから、臨時財政対策債等に含めている。

公債費・県債残高の見込みについて

- ・建設地方債等については、平成19年度以降、増加傾向であったが、25年度以降は、減少に転じている。第二次行財政改革取組では、減少傾向を維持することとしている。
- ・臨時財政対策債等については、平成21年度以降における急激な県税収入の落ち込みに対応するため、大幅な増額となるなど、15年度以降、その残高は大きく増加している。
- ・県債残高全体としては、平成20年度に1兆円を超え、31年度末には1.4兆円と見込まれる。
- ・公債費(折れ線グラフ)は、臨時財政対策債の増加に伴い伸びており、平成23年度には1,000億円台に到達した。31年度には、1,248億円まで増加する見込み。

(4) 投資的経費の状況

図9 投資的経費の推移



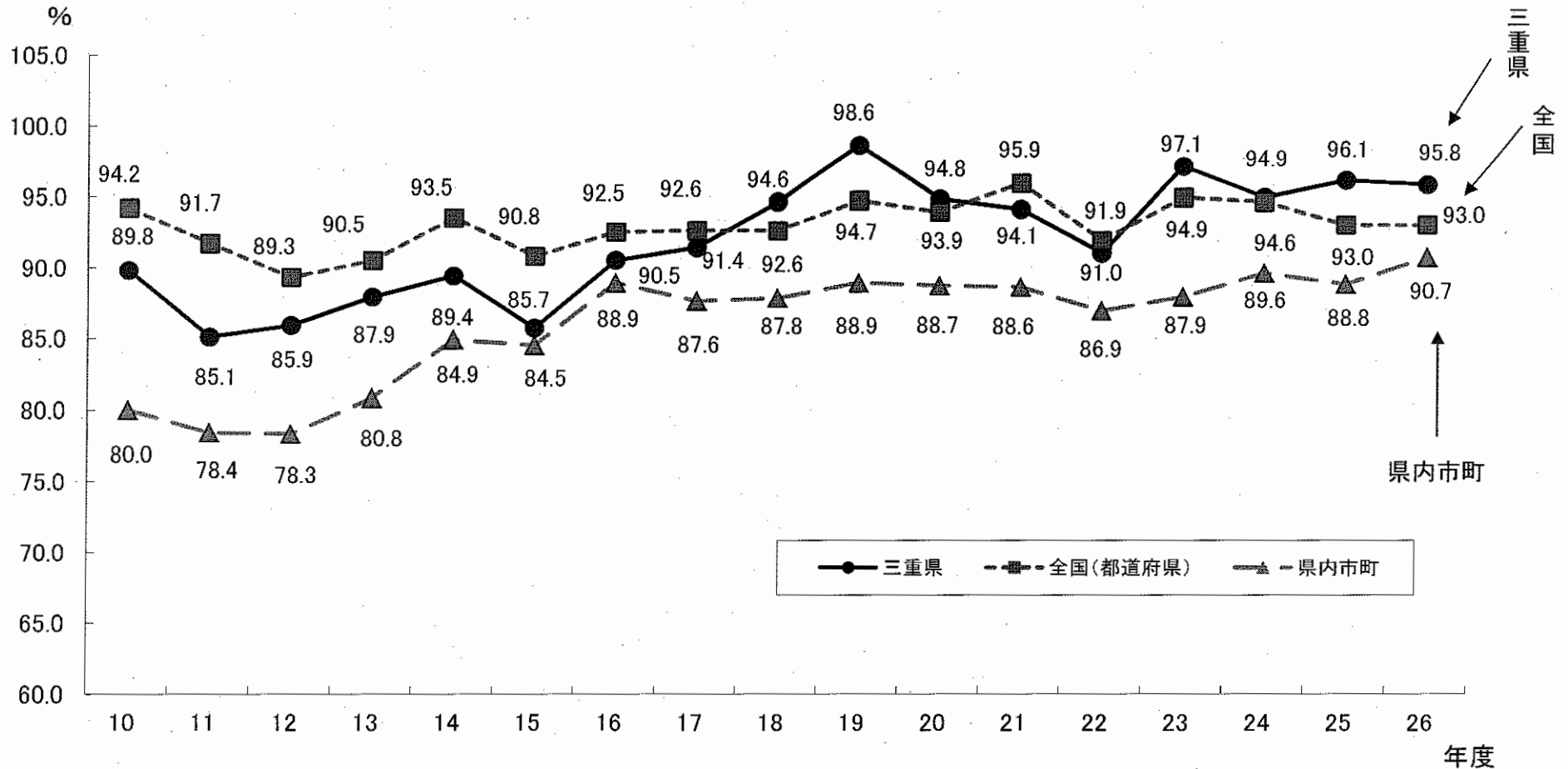
(注) 普通会計決算ベース(平成28年度は1号補正後予算額、平成27年度は最終予算額)
 なお、平成27年度、28年度は予算ベースのため、前年度からの繰り越しは含まれていない。

投資的経費の状況について

- ・投資的経費は、景気対策や公共施設建設などにより、平成11年度まで高水準で推移してきたが、12年度からは減少傾向で推移。
- ・平成24年度及び25年度は、紀伊半島大水害等の復旧対応及び国の経済対策に係る補正予算への対応により増加。
- ・平成26年度以降は、1,100億円台で推移。

〈参考1〉 経常収支比率の推移

図10 経常収支比率の推移



(注) 普通会計決算ベースで、全国には東京都を含む。

経常収支比率(財政構造の弾力性を判断する指標)

- ・県税、普通交付税など、毎年経常的に収入されるもので、地方公共団体が自由に使える財源のうち、人件費、扶助費、公債費など毎年経常的に支出される経費に充てられた財源の占める割合のことで、率が高いほど財政の自由度が低いことを示している。

・式で表すと、

$$\left[\frac{\text{経常経費充当一般財源}}{\text{経常一般財源総額}} \times 100 \right] \text{ となる。}$$

- ・県レベルでは、75%が適当と考えられ、80%を超えると弾力性を失いつつあると考えられている。
- ・三重県は平成26年度に95.8%となり、16年度に90.5%となって以降、11年連続で90%を超えることとなった。財政需要に機動的に対応できる自由度が失われている状況が長期間に渡り継続している。

<参考2>

県の財政を一般家庭に置き換えてみた場合

県の会計を一般家庭に置き換えてみた場合

収入

(単位:万円)

	平成16年度	平成26年度	備考
給料	297	276	県税収入、使用料、諸収入など
親からの仕送り	304	315	地方交付税、国庫補助金、臨時財政対策債など
貯金取崩し	21	20	基金の取り崩し
ローン	68	62	地方債(臨時財政対策債は除く。)
計	690	673	

支出

生活費	566	543	
ローン返済	99	114	
計	665	657	

ローン残高	922	1,355	
貯金残高	45	25	財政調整のための基金
貯金残高	32	26	その他特定目的基金

【参考】

10年間の生活費の推移 566万円 ⇒ 543万円(▲23万円)

福祉の向上に	58万円 ⇒ 103万円(+45万円)
犯罪・交通事故防止に	40万円 ⇒ 36万円(▲4万円)
道路・住宅・公園などの整備に	100万円 ⇒ 87万円(▲13万円)
農林水産業の発展に	52万円 ⇒ 36万円(▲16万円)
教育・文化に	179万円 ⇒ 171万円(▲8万円)

県の財政を一般家庭に置き換えてみた場合

平成16年度から10年後の平成26年度にかけて、

収入の面では、総額で17万円(690万円⇒673万円)の減少
(3%のマイナス)。

支出の面では、ローンの返済が高水準で推移しているため、生活費を切り詰めるを得ない状況(23万円の減少)となっている。

借金の総額は約1.5倍になっている。

※県民の皆様に県財政を実感してもらえるよう単純にイメージ化したものです。